第二次代表短歌叢書第二篇

幀裝 河野通勢氏

與謝野晶子著

自歌選集

人間往來

改造社版

自選歌集

人間往來

第二次発表短歌書第二篇

與謝野晶子著

改造社

現代
歌集
人間往來
與謝野晶子著
改造社

自選歌集

來往間人

與謝野晶子著

ぬきもの
ぬ
ぬ
ぬ

人間往來

與謝野晶子

何となく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな

海戀し潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家

祭の日葵橋ゆく花がさの中にも似たる人を見ざりし

ほととぎす治承壽永のおん國母三十にして入
りませる寺

七人の美なる人あり簾して船は御料の蓮きり
に行く

水に咲く花のやうなるうすものに白き帶する
浪速の子かな

家七室霧にみな貸す初秋を山の白湯めでこし
やまろうど

戀はるとやすまじきものの物懲に亂れはてて
し髪にやはあらぬ

若き日のやむごとなさは王城のごとしと知り
ぬ流離の國に

かざしたる牡丹火となり海燃えぬ思ひみだる
る人の子の夢

花草の滿地に白と紫の陣立ててこし秋の風か
な

春雨やわがおち髪を巣にあみて育ちし雛のう
ぐひすの啼く

遠方に星の流れし道と見し川のみぎはへ出て
にけるかな

物思へばものみなものううたた寢に玉の螺鈿
の枕をするも

をとうとはをかしおどけし紅き頬に涙流して
笛習ふさま

五月雨春が墮ちたる幽暗の世界のさまに降り
つづきけり

知恩院の鐘がさまさぬ人覺めぬ扇もとむるわ
が衣ずれに

大井川山は雄松の紺青とうすき楓のありあけ
月夜

夏の風山より來り三百の牧の若馬耳ふかれけ
り

相人よ愛欲せちに面痩せて美くしき子によき
ことを云へ

ほととぎす安房下總の海上に七人ききぬ少女
子まじり

大赤城北上つ毛の中空に聳やぐ肩を秋の風吹く

やはらかに寝る夜ぬぬ夜を雨知らず鶯まぜて
そぼ降る三日

牡丹うゑ君まつ家と金字して門に書きたるひるの夢かな

水引の紅き二尺の花ひきてやらじと云ひし朝露の路

白樺の折木を秋の雨打てば山どよみして鵲鳴くも

十餘人縁に並びぬ春の月八坂の塔のひさし離るると

みづうみに濁流おつる夜の音をおそれて寝ぬ
ぬ山の雨かな

やはらかき少女が胸の春草に飼はるる若き駒
とこそ思へ

天人の飛行自在にしたまふとひとしき程のも
のたのむなり

頬に寒き涙つたふに言葉のみ華やぐ人を忘れ
たまふな

今日もなほうら若草の牧を戀ひ駒は野心忘れ
かねつも

物思へば中にみじかき額髪しばしば濡れてく
せづきしかな

春の磯こひしき人の網もれし小鯛かくれて潮
けぶりしぬ

少女子はもろむき心花に似んこれは頼める人
なるものを

三吉野の櫻咲きけり帝王の上なきに似る春の
花かな

戀人は現身後生よしあしもわかたず知らず君
をこそたのめ

わが肩に春の世界のもの一つくづれこしやと
御手を思ひし

あらし山名所の橋の初雪に七人わたる舞ごろ
もかな

女をかし近衛づかさは纓巻きて供奉にぞまゐ
る伊勢物語

夏の花原の黄萱はあけぼのの山頂よりもやや
明くして

くらやみの底つ岩根をつたひゆく水の音して
寝ねえぬ枕

つややかに春の灯ならぶ圓山へ法の火ともる
音羽の山へ

來啼かぬを小雨降る日は鶯も玉手さしかへ寝
るやと思ふ

これ天馬うち見るところ鈍の馬埴馬の如きを
かしさなれど

泣寢してやがてそのまま命絶えやさしき人の
からと云はれん

かたらひししるしに取りし小ゆるぎの磯の石
にも似たる菊かな

生れたる新しき日にあらずして忘れて得たる
新しき時

朝の雲いざよふもとにしきしまの天子の花の
山ざくら咲く

臘日の來ると野寺のうしろ籔穗すすきばかり
雪被くかな

かきつばた白き國には王います少女の國はむ
らさきにして

天竺の流沙にゆくや春の水浪華の街を西す南す

二三騎は木の下かげにはたはたと扇つかへり
下加茂の宮

思ふ人ある身は悲し雲わきて盡くる色なき大空のもと

高き屋にのぼる月夜のはださむみ髪の上より
うすものをきぬ

街の雨比叡の小雪のゆきかひにみぞれとなり
し京の北かな

秋の雲はかな心の人待ちに涙ながしてありと
思ひぬ

かはせみや前の流の圓ら石つぶつぶ乾き冬の
日の來ぬ

山寺の一重の櫻ちるに似てさびし夜明の星消
ゆる空

若き日の火中に立ちて相とひしその極熱のさ
かひにあらず

火に入らん思ひは烈し人を燒くほのほは强し
いづれなりけん

野分姫百人手とりしろがねの靴してきたる花
ぐさの上

あさましく雨のやうにも花おちぬわがつまづ
きし一もと椿

わが前に紅き旗もつ禁衛の一人と君をゆるし
初めにし

朝顔の蔓きて髪に花咲かば寝てありなまし秋
くるるまで

人の世にまたなしと云ふそこばくの時の中な
る君とおのれと

言葉もてそしりありきぬ思ふとはすこし劇し
く思ふことかな

白蘭の園に麒麟を放つ日もものはかなき歎
きをぞする

秋の雨わたり二間のわたどのの洞の中より灯
をもちてきぬ

おどけたる一寸法師まひ出でよ秋の夕のての
ひらの上

雨がへるてまりの花のかたまりの下に鳴くな
るすずしき夕

うき指にうす墨ちりぬ思ふこと恨むことなど
書きやめて寝ん

戀人の逢ふが短き夜となりぬ茴香の花たちば
なの花

わが髪の裾にさやさや風かよふ八疊の室の秋
の夕ぐれ

文のから君の心をいと多くたくはへつると涙
こぼれぬ

月の夜や木立も草の花もなし水をたたへて馬

だらひをおく

三尺のたななし小舟大わだにおのれ浮沈す人

あづからず

夕風や煤のやうなる生もののかはほり飛べる

東大寺かな

男にて鉢叩きにもならましを憂しやとかこち

うらめしと云ふ

一人はなほよしものを思へるが二人あるより

悲しきは無し

遠方のものの聲よりおぼつかな綠の中のひる

がほの花

あかつきの竹の色こそめてたけれ水の中なる
髪に似たれば

朝顔の小き花はうら悲し戀しき人の三十路す
るより

赤とんぼ風に吹かれて十あまりまがきの中に
渦卷を描く

少女子の心亂してあるさまを萩すすきともあ
などりて見よ

垂幕もとばりも春は襞つくれ思ふ人らのたは
ぶるるごと

佛などわが見及ばぬきはながら戀の如くにた
のまばよけん

戀をして年頃ふると髪白き長者の問ひに言ふ
こともこれ

十二まて男姿をしてありしわれとは君に知ら
れずもがな

わがよはひ盛りになれどいまだかの源氏の君
の訪ひまさぬかな

戀人は空のはてより遠方にやりつるものと旅
を思へり

青海に冷き秋の水おとす川二つある腰越のさ
と

ほととぎす白の袷の裾ならべ五たりいます法
華寺の衆

あらかじめ思はぬことを共に泣くかるはづみ
こそうれしかりけれ

龍騎兵いで入るたびに旗とりてわれをまもる
もこちたくなりぬ

わがたのむ男の心うごくより寂しきは無し目
には見えねど

棧道に夕日の照ればあはれなり危きもののあ
からさまなる

あかつきのかのまた川の湯の樋より紅葉の中
にのぼる白雲

ひたひたと身を投げかけて思ふらく蛇の心の
われに現る

あさましき素肌の少女見る如き貝のからかな
眞白けれども

薔薇咲きぬかつて夢寐にも知らざりし思ひご
とする人のほとりに

飽くをもて戀のつづきと思ひしにこの寂しさ
も戀のつづきぞ

雲流る多くの人にのぞかれて早書きをする文
の如くに

わが逢はん男の數を語れよと戯れつれば相人
は逃ぐ

初夏の楓の枝に藤ちれば花笠に似てなまめか
しけれ

天てらす神の御馬にわが子等が豆を食まする
朝霧の中

ことごとく因縁和合なしたりと思へる家も時
に寂しき

秋の夜の灯影に一人もの縫へば小き虫のここ
ちこそすれ

沖つ風吹けばまたたく蠟の火にしづくちるな
り江の島の洞

あけがたの山の岩間の湯にあれば近き雲より
小雨そぼふる

みづからを山の湯ぶねに朝くだる白き雲かと
おどろきぬわれ

相あるを天變さとし人騒ぎ君は泣く泣く海こえにけん

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らしめメヅザの神よ

おのれこそ旅ごこちすれ一人ある晝のはかなさ夜のあぢきなさ

おなじ世のこととは何のはしにさへ思はれがたき日をも見るかな

休みなく火の心もて戀ふるなるわれにいつしか君飽きぬらん

琴の音に巨鐘のおとのうちまじるこの怪しさも胸のひびきぞ

人の世の掟の上のよきこともはたそれならぬ
よきこともせん

わが息の虚空に散るもうれしけれ年の明けた
る一日二日

不可思議のよもあらじとて入りもこし女の心
の臓ならめ君

清らかにつゆよこしまの無きものにかの日の
戀もなりて終りぬ

三月の柳を折りてあまりにものを隠さぬ風
流男を打つ

うすものの夏も寒げに見ゆるまで痩せたる人
となりにけるかな

わが子等がおしろいをもて青桐の幹に字かけば鶯ぞ啼く

しろがねの燭臺一つ中に立ちしめやかなるは三十路のこころ

草むらに鬱金の一葉まじりたり透きとほりたる秋風の中

あさ綠楓の木をば來てゆする夜明の風にまじれり胡蝶

大きなる日のおつるなど見ればうし思ひ上れるわが心から

わが閨の眞白き麻のふすまより十二時ごろの月は出でけん

生れたる日のごと死ぬる日の如く今日を思ひ
てわれ旅に行く

わが泣けばろしや少女きて肩なでぬアリョル
號の白き船室

戀人に逢はん日遠しふるさとを見ん日しられ
ずいかがすべきぞ

夕ぐれは車の卓の肱濡れぬ胡地のけしきの心
細さに

三千里わが戀人のかたはらに柳の絮のちる日
に來る

ああ皐月ふらんすの野は火の色す君もコクリ
コわれもコクリコ

わが小舟雨に濡れつつ白鳥とうちならびゆく
二時がほど

旅人の涙なれどもなごやかに流るるものか夜
の巴里に

あえかなる踊子きたりわが前に杯をあぐ灯の
海の底

月さしぬロアルの河の水上の夫人ビニョレが
石の山荘

さまあしくいたくものを思ふかな東の島に
子等をおくとて

目の前に霧のくだると思ふかな羅をかづきた
る人ぞきませる

海峡の燈臺の灯は明滅すわがおちつかぬ旅の
こころに

白塔の窓のあかりはうば玉のくらがりよりも
かなしかりけれ

象を降り駱駝をくだり母とよびその一人だに
走りこよかし

君とわれ高きに上り橋あまたかかれる水をの
ぞく夕ぐれ

おのづから大路の白き敷石に心ひかれて夕あ
りきする

酒場の地獄の給仕かのこともその日のわざも
見透して云ふ

秋風は凱旋門をわらひにか泣きにか來る八つ
の辻より

わが車後に高き噴水の立つと思ふがここちよ
きかな

ひろくして盡きんともせず森のみち涙するま
で妬ましきまで

白鳥をもてあそぶため手を打ちぬはた嬉しさ
のおもひ出のため

唯だあるは黄金の王座と水晶の曇れる器旅人
のわれ

いにしへの君王の閨金色のまくらに通ふ秋の
初風

水晶の燈籠のもと白き手を王に與へて人歩み
けん

たそがれは森よりわれを追ふごとし君と踏む
べき街の灯のため

さびしげに海に浮べりわが心エトナの火をば
なほ抱けども

ふらんすに君を殘してわが船のいづる港の秋
の灰色

南國の木の實を吸へば涙おつ昨日の戀の味に
似たれば

船に寢るいやはての夜の思ひなどあはれなり
けり女心に

子を思ふ不淨の涙身を流れわれ一人のみ天國
をおつ

罌粟の花くづれしままを見る如く悲しきこと
はそのままにおく

春の朝春のまひるも夕ぐれも寂しさつづくお
のれとなりぬ

くれなゐの桃の蕾を思ひつつ藥を飲みぬ病め
る三月

戀ならず仇にあらて友よりも忘られがたき人
にもあるかな

身の中に悲しみの湧く筋などのあるここちし
て手をながめゐぬ

船に居て陸に着く日を思ふごと戀のをはりの
時に思はる

今ひと度西の都の元朝に緋の帶しめてわれを
練らしめ

大空の日の面をば濡らすごと菜の花に降る春
の雨かな

花かをり鼠ことともの囓める春の夜明のな
まめかしけれ

心いと正しき人がいかさまに僞るべきと思ひ
みだるる

花よりも戀しき人の顏よりも嬉しく思ふ夕風
ぞ吹く

心中をせんと泣けるや雨の日の白きこすもす
紅きこすもす

小鳥來て少女のやうに身を洗ふ木蔭の秋の水
だまりかな

初春のうら白の葉やかけなまし少し恨みのま
じる心に

老いぬらん去年一昨年の唯ごとのそのなつか
しさ極りもなし

日の暮は君の戀しやなつかしや息ふさがるる
ここちこそすれ

大空のうす黄の雲となりて散ることを宜しと
定めかねつも

しづかなる風の流のここちよき十一月の黒檀
の夜

若くして思ひしことの目に見ゆれ白き扇をも
てあそびつつ

わが二十町娘にてありし日の面かげつくる水
引の花

やがて着ん秋の袷のおもはれぬかはたれ時に
しら雲飛べば

その心歎く時にもよく合ひぬ戀せばいかに哀
れなりけん

草むらを塔の如くに見する風吹く夕ぐれは寂
しかりけり

山の草水噴き上るかたはらにあぢきなしやと
空を見るかな

萱の葉のかたちに習ふ人かとも自ら笑ふ思ひ
痩せつつ

こほろぎや男女の文がらの多きが中に埋もれ
て聞く

野の池のこころもとなき皺に咲くうす藍色の
水草の花

雨降ればわれの若さに寂しさの入りくる門を
見ることちする

女の子唖の手振りをすることに飽く時降りぬ
夕立の雨

風吹けばはなればなれに花うごくつりがね草
のあぢきなきかな

この二人祭の日ぞと思ふことあまり多かる日
おくりをする

朝顔はわがありし日の姿よりすこし寂しき水
色に咲く

天上と地獄をもちし疑ひにまさらず君が懺悔
のあとは

君のみが戀人なりとわれ云はる長き懺悔をき
けるしるしに

懺悔ききぬ今たちかへり華めかん身になりぬと
も思はれずわれ

かにかくに君は君のみ知る世界われはわれの
み見つる日を持つ

わが船の汽笛に散るもはかなけれ紀の勝浦の
あけぼのの雲

いにしへの帝王達もよぢにける路絲のごと山
を這ふかな

うぐひすや百艘の船とどまれる洞にひとしき
山かげに啼く

河原には小家おかれぬ鳥來り砂に生みたる卵
のやうに

白き桶三つ四つ置かれせつなげにかなかな啼
ける夏木立かな

全身を口びるのごと吸ふ波をややうとましく
思へる夕

海の上つりがね草の袋よりやや赤ばみて夕立
ぞ降る

心など手にとりあげてながめなばいかに涙の
流れんわれは

水だまり五月の雨にくだけたる薔薇を浮べぬ
白鳥のごと

天つ神もしくはわれのいにしへが姿を見せて
慰めに來よ

香木の朽ちし匂ひを立つるなり黒き茸も白き
きのこも

抑へたる赤きとんぼの羽ばたきぬ戀かと思ふ
手ざはりをして

空樽の中よりいでし大やんま雲に入る時夕風
ぞ吹く

寒げなる莚の上に手をかさね瞽女ぞいませる
心覗けば

いにしへを忘れぬ惡を人なしぬ忘れやすかる
男の中に

われ倦めば戀しゆかしと思はるる能なきさま
にうたたねぞする

大空へ魚みな上る夜のさまと月ある海の見え
もこそすれ

王宮の鏡の室より生れこし秋風めぐるこのた
わやめを

秋と云ふ生ものの牙夕風の中より見えて寂し
かりけり

假の身も水また雲のいにしへにいささかかへ
るここちす秋は

落日はつよき力をうち忘れ女のごとく戀のみ
に燃ゆ

いと高く穂上ぐるすすき大空の雲の心を覗け
る薄

とけ合はぬ繪の具のごとき雲ありて春の夕は
ものの思はる

思ふことと無げに美くしいなあらずもの思はん
ともてる若さぞ

ほのかにも瓦の濡れし屋根を見て冬の初めを
悲めるかな

初めより目に見えぬもの消えさりしこのおど
ろきに勝るものなし

さばかりのめでたき帝いましける世もこの日
よりいにしへとなる

かしこかる御代の初めの宣命を待てる心のす
がすがしけれ

あなめでた南殿の母屋に天上のよそほひした
る高御座立つ

悠紀の殿主基の殿よりみあかしの洩るるを思
ふ清き夜半かな

まぼろしが幻として消ぬ藥われのみぞ持つ君
のみぞもつ

千よろづの言葉も唯の一言も云はぬも聞きて
悲し女は

あな戀し琥珀の色の冬の日の中に君あり椿と
なりて

誰ならん世の常事のかたはらに人を忘れん苦
行をつむは

ささやかに雲立ちのぼる少女子の羽子の板よ
り雲立ちのぼる

火のいとも銀絲の筋も見ゆるなり亂れごち
の美くしきかな

死ぬことも夢のやうなることながら重ぐるし
けれ戀に比べて

なげくこと多かりしかど死ぬきはに子を思ふ
ことよろづに勝る

人よりも母のつとめを知れるごと君あらぬ日
にふるまふは誰

身のうちにアマリリスより紅き花咲かせて二
人相見しものを

かにかくも皐月は悲しもの思ふ家のをぐらさ
外の明るさ

憎むにも妨げ多きここちしぬわりなき戀をし
たるものかな

折ふしに男の心迷はずばいやが上にもめてた
きものを

山風に雨の混れば濡れにけり黒き枯木も白き
枯木も

ひるがほの花の色する肱まげて假寢するまも
忘れぬものを

わが晝の雨の中なる百舌の聲こほろぎになれ
馬追になれ

大空のうち曇りつつうす色の梅など散ればき
さらぎ終る

わが鏡顔はよけれど寒げなる肩のあたりはう
つさずもがな

七月やうすおしろいをしたる風歩みきたりぬ
木の下行けば

簞笥より去年のかたびらとりいづる手ざはり
などは何にたとへん

鬼の面狐の面をきて遊ぶ子等を廊下に吹く秋
の風

高き草噴泉のごと火の山の煙のごとく風にう
づまく

いと多く白菊咲きぬ戀と云ふことなどすべて
知らぬさまかな

はしけやし白き孔雀をかたはらにおくこころ
する中頃の秋

君とわが創造したる境にて一人ものをば思は
ずもがな

十月や野にあるよりも何よりもとくうらがれ
し屋根の草かな

いにしへのクレオパトラを飾りたる玉の色し
てめてたきダリヤ

この國に少女と生れ戀人とそだち心はやや華
奢に過ぐ

夏の花風のよすがに匂ふなり心と心通ふ日も
がな

花一つ胸にひらきて自らを滅すばかり高き香を吐く

ことごとく石濡れゆけば俄かにも夜のここちする山の家かな

後の世を無しとする身もこの世にてまたあり得ざるまぼろしを描く

木の下の池菱形にほの白き春の月夜を忘れたまふな

木蓮の散りて干潟の貝めける林のみちの夕月夜かな

ただ一人柱によれば わが家も御堂のごとし春のたそがれ

ありと聞く五つの戒の一つのみ破りし人もも
のの歎かる

天人の一またたきの間なるべし忘れはててん
としごろのこと

苦しげにものの油のしづくするさましてを終る
秋の薔薇かな

静かなる心はもてど身の作る華奢ゆゑわれも
春の花めく

そのかみの日の睦言を塗りこめし壁の如くに
寄りて歎かる

飛ぶ車空よりこしと春の一日に袖振り歸る子を
ば思ひし

月見草雨ののちなる山松のしづくちるなり黄
にひらく時

灰色の雲の中にて山の鳥うらめしきこと思へ
とぞ啼く

わが子故マリヤの像の膝にあるエスさへ病め
るここちするかな

夜の二時を晝のここちにゆききする家のうち
かな子の病ゆゑ

わが庭の小米櫻がすすきより弱げになびく夕
月夜かな

秋の夜はわりなし三時人まてばあはれに痩せ
しここちこそすれ

半よく心にかなふ日の如く半の寒くさびしき
日かな

手に載せて砂を吹けども濕りたる砂もおのれ
もなぐさまぬかな

元日も二日も同じ爐のほとり君がかたへに春
をことほぐ

元日のひるのしづけさわが家も知らぬ島根の
ここちこそすれ

あぢきなし君が心の聞えくる耳をもちつつ忘
れんとする

初夏のあやめと早く定めてき人よりすこした
ち勝るとて

もの云はじ山に向へる、ここちせよ君に加ふる
半日の刑

思ふ人旅にやりつるたぐひかと悲しきことを
聞けば泣かるる

戀人の涙に似たる香を立ててうばら咲く日と
なりぬ武藏野

子の飼へる五つの雛のにはとりがものの菜食
めり彌生朔日

初夏は夕も朝のここちする君に逢はねど見る
ここちする

紫の魚と思ひてわれも行く海の底めく夏の月
夜に

空低く波より沫のちりしかと星も見えつつ涼
しき夕

戀人と假に定めしその日より涙ながれぬ君を
思へば

巴里にて虫啼かぬ夜をわびしやと思ひしこと
を病みて思へる

わが御者が角吹きやめば水の音高く鳴り出づ
山怒るごと

萱のびて尺に尺添ふ草ならてくろ髪ならばを
かしからまし

母の顏木の間の月を見るやうに子は遠く見る
病してより

長持の蓋の上にてもの讀めば藏の窓より秋風ぞ吹く

麻を著て初めて蟬をきく日などあはれなりけり夏の盛りも

いつしかと月夜になりぬわが行くは天の川より長き坂かな

凋落も春のさかりのあることも敎へぬものの中にあらまし

音立てて石の山にも降れよかし下の襟のみ濡らす雨かな

重ぐるし春ことごとくわが上に殘りとどまるここちこそすれ

夏の空梅蘭芳の顔見ゆと月の上れば人のささめく

雛罌粟も身を逆しまになすはては茅の草より寂しからまし

さかしげに君が文をばおさへたり柏の葉より青き蟷螂

目の前に淡雪ちりぬ何ごとも云はて死ぬると言ふ形して

御言葉をよしときくのみ人に似ぬさびしき色の花ごころかな

靄立てば浴槽の底に桃李咲く園のありとも思ひけるかな

戀の塵つもりゆくなる人の子が泉を浴びに入
りし山かな

何れにもひたさまほしきおのれかな溫泉の中
冷泉の中

紫の傘して山を見に出でぬ旅より戀にこころ
ゆく人

溪川は雨に濁らずくれ竹の青き色すれ百尺の
下

日の暮の明星嶽の山風にすこし萎れし戀ごこ
ろかな

涙をば受けんと思ふさましたりいとあさまし
や水晶の盆

紫苑咲くわが心より上りたる煙の如きうすいろをして

過去の世は海より深し白玉も珊瑚もさぐりいてがたきかな

明日と云ふよき日を人は夢に見よ今日のあたひはわれのみぞ知る

いかづちの生るる熱き湯の音をかたへにしたり今朝のくろ髪

白鳥にまなぶ驕りもはかなしと泉を出でて今日は山行く

山吹を遊ぶ螢と思ふまで小暗き溪の木下みちかな

娘にて藏の板敷ふみたるにまさり冷きおく山
のみち

淺みどり風にも散らんほのかなるはかなき色
の榛の一むら

心から身もよもあらず散りがたの寂しく見ゆ
る夏の花かな

眺めやる沖の小島のこちすれむら薄まだ若
やかにして

目とづれば梅蘭芳の幻の見ゆるおのれもめて
たかりけれ

地に落ちし椿はおなじはらからのあまたとな
ほもより添ひて寢る

櫨の葉の魚のさまして這ひよるもさびしき園
となりにけるかな

めでたくも二心なき雛をおく小き人と親親の
ため

くれなゐの尾をば櫻にかけたるは山鳥に似る
春の落日

光悦が金を塗りたる篋と見ゆ銀杏めてたき熊
本の城

なのりそを波の中より拾ふなり身にかかはり
のあるもののごと

君とあるくれなゐ丸の甲板も須磨も明石も薄
雪ぞ降る

ことごとく鏡のありてうつるともうつらぬほどの小き悪心

戀をする人の中よりおのれをばけづらんとして旅に出でけん

よき車あまた通ひぬ初夏のこころの上の敷石のみち

夕にはもとの蕾にかへるなり花菱草になるよしもがな

心より早くはしこく動くなどわが扇をば思ふものかな

秋風の打とけぬごと吹くものか街の女も寂しきものを

一人居てほと息つきぬ神曲の地獄の巻にわれを見出てず

おもげにもかがりのしづく夕月の光の中におつる山莊

もの云ひてわれの立てるは小板橋君が立てるは弓形の橋

寒き風清きひかりの通ふとて窓を悲む階上の客

雲などもきてなびくかと廣やかに高く寂しく見ゆる家かな

旅路より都に入れば龍宮のうろくづのごと人のうつくし

二十六都の北の洞門をくぐれば草に秋風ぞ吹く

しらじらと雲と水との起き出づる淺間の山の朝の溪かな

日の落つる方も見えずて暮れゆけば心さびしき山莊の客

水の音烈しくなりて日の暮るる山のならはし秋のならはし

うら悲し北の信濃の高原の明星の湯にわがあることも

山の菊かづらのさまに靡くなりたのみ合はてはさびしきがため

目の前に蘭陵王を舞ふとんぼいみじく清く日
の暮れてゆく

雑草の二人静は悲しけれ一つ咲くより花咲か
ぬより

しろがねの笛の細きも燃ゆる火の焔のはしも
甞むるくちびる

曼陀羅のかの極楽の樓臺にながむる如き春の
夕映

夕風の渡ると見えてはかなげにつり橋うごく
草のおくかな

身の半焔に卷かれ寂光の世界を見るも戀の不
思議ぞ

しら玉をさぐる海人よりときめきて薔薇の園
生の夕闇を行く

刧初より作りいとなむ殿堂にわれも黄金の釘
ひとつ打つ

いささかの朱泥の葉をばとどめたる木の枝う
ごく夕月夜かな

君は君われはわれをば忘れずと歎きぬ少しわ
れを忘れて

樂みを極めしのちの人のごと寂しなど云ふわ
れもはかなし

今知るはつひに天馬の走せ入りし雲の中なる
寂しさにして

悲みも羊の肝のあつものも昨日となればこと
ならぬかな

何ごとか知らずかがりの燃えに燃え宿のある
じに叱らるる馬

雲間よりむら雨こぼれ馬濡るる明星の湯の前
の庭かな

渚より大湯の靄のたちのぼり第一の坂つばき
花ちる

伊豆の雨柑子椿はやしなへど旅の心の上にお
よばず

都にて見たりし夢の續きをば見しあはれなる
朝ぼらけかな

浴泉に耽れど魚のさがならずものうち思ひ涙
こぼるる

波かへる天城の嶺のしら雪のここより海へく
づるる如く

ひまもなく鷗とぶなり樓船にあるここちする
階上の客

觀魚洞よこを過ぎゆく浦島の竹の棹のみほの
白くして

悲みも心に知りしことわりもやがて忘れし溫
泉の毒

朝なれば沖の方へといぬ波も日に靡くかと美
くしきかな

湯ぶねより春の渚のしら波に身をよそへつつ
出づるたはぶれ

愁ひつつわれと豆相の温泉をめぐるに似たり
鳩色の雲

十の國見んと思はず戀人の心を覗く山のあれ
かし

山なれど籠にやしなふ鳥のごと羽まろくして
立つ椿かな

ある夜半に雪の外なるあられ來て雪を踏むな
りポルカのやうに

立春の日も寂しけれ遠近の木の下の雪蠟の色
して

或時は蜂のうなりにまがひ降るくらき大木の
下かげの雨

五月雨時の流のとどまらずゆくとも見えず同
じ日つづく

越の國かかる幾重の山なみのいづくを裂きて
われ來りけん

霧迷ふ信濃の溪を立ち出てて北海に來ぬ秋風
とわれ

ほととぎすわが赤倉にこし日より亂れ心とな
りにけらしな

閨を吹く妙高おろし烈しけれ戀もうらみもこ
れにゆづらん

わが山につづく海晴れ空の晴れ飛魚と見ゆ秋の夜の星

妙高の裾野のみちは廣けれど中に藻のごといたどり茂る

觀音の千手のやうにことごとくひとしき丈の赤倉の杉

日の射すを山のおもてと思ひしに夕月いでてさま變りけり

北海を湯ぶねに覗く人の世を戀しと思ふ天女のやうに

何故に雲とさかひの入りまじる山踏むことをならひ初めけん

上つ毛か越かいづれぞ旅人に悲しき音の水を
おくるは

秋の水もの悩みして曇るなり信濃の澁の山あ
ひに入り

ほととぎすわれは五更のゆぶねにて戀の涙を
洗はんとする

人人と霧をへだてて立つこともさびしき山の
夕まぐれかな

秋風や千曲の川の船橋はたなごころほど中低
くして

春の雪勸進帳の強力のごとあてやかに歩む
のかな

賜はりし牡丹に代りもの言はん長安の貴女人
を怨まず

十日してたしかに春の來ることを知るは太鼓
をうてる子等のみ

白鳥が生みつるもののこちして朝夕めづる
水仙の花

物見臺さることながら目をとぢてわれは木の
葉のちる音をきく

秋の薔薇おち葉する木のもとに居てうす紫の
夕月を待つ

夕方は霜がれ時の朝よりも雁などわたり若や
かに暮る

はなやかに見ゆれど秋の落日はただ一重のみ
くれなゐを著る

歸りこんものと思はず大海へしづみ入るべき
いさり灯と見ゆ

雜木より薄の丈のたちまさりその穂眞白くな
びく山かな

よそにして思ひしよりも冷たけれ砂丘の上に
一人坐れば

網乾せり梅蘭芳の輕羅よりかしこきものをも
てなすやうに

唯聽かず鏡が浦をゆく船にものもいふべき潮
音の臺

音羽屋がゆたかに踊るふりを見てうら安の世
と思ひ初めてき

義理に泣く小春役者は悲しけれわが見るうち
に身の細りゆく

雨降りて青磁の色に濡れゆきぬ銚子へかよふ
松山のみち

この度は犬吠岬の燈臺の冷きいろにおどろか
ずわれ

その日より波いくかへりかへりけん過去も未
來も知りがたきかな

波寄れば未央の園の白蘭のちりしくみちをゆ
くこころする

よろぼへる豫言者の船新しき二十ばかりの若人の船

二階より綠の鳥の覗くをば夕月めくと君に云ふかな

洞門や箱根の溪の夕風の身に沁む人はたちも隱れん

星一つ溪間の灯よりはかなげにまたたく山の頂の空

物思ふ人より早く眠りたり水の彼方の明星が嶽

ひるがほはいづくに見てもわが脱ぎし衣とおぼえてあはれなつかし

山荘の冷き書庫の露臺よりひらくを見たる月見草かな

巡禮を待つべからざる塔なればならひを破り九萬尺に立つ

蔓草のごと知らぬまに丈のびて子のかへりなば悲しからまし

煙上げ雨のつまづく初夏の榛の大木にほど近く立つ

山の雨溪へおつれば音もせずなほ雲とのみ呼びてあらまし

かんばしく丹朱を敷きて流れたり伊香保のおくの極熱の川

灯のにじむ雨夜の山も温泉の代赭の色にかよひたるかな

くれ竹も春の初めは青銅の寒き色して風に鳴るかな

涙おち圓のもつるる面白きいてゆの紋はわれのみぞ見る

伊豆と云ふいてゆの國をゆきもどりすれば心も春風となる

ゆぶねより小波つくり急ぐなり月の世界へゆく湯のやうに

湯を浴びて伊豆にむすびし夢路より續きしみちは洞門の斷つ

狩野川を越え鹽屑の洞門を出てても馬車は天城に抱かる

日のくれに白き馬つけ伊太利亞の車も出づる
多比の洞門

何すらん船の數ほど人居たり口野の浦の春の
たそがれ

御空よりわれを認めし星おちぬ人の戀ほどた
めらはずして

山國の西も東もしらぬなり雨と日かげのこも
ごもに降り

桂川高き欅のかげにして鷹の巣めきし樓より
ぞ見る

御空より半はつづく明きみち半はくらき流星
のみち

戀と云ふ身に沁むことを正月の七日ばかりは
思はずもがな

わがおちし奈落の底に燃ゆる火も衰へがたと
なりにけるかな

風來り白き朝顔ゆらぐなりこだまがもてる口
びるのごと

たそがれの砂丘に風の渦卷けばさびしき雲に
乘るここちする

何ごとにものごりしたるかたくなに縱に咲き
たる木蓮の花

何となくうらはかなけれ空見れば正月の日の
西に傾く

昨日となしつることが明日逢はん世のここち
して思ひ亂るる

何とかや四萬の名所の谿谷の底に青めるわが
涙かな

いなづまを山の宿屋のひろ庭に眺めて秋を待
たんとすらん

樋の水は後ろにしたるきりぎしの朱をうつし
つつ零れてぞ行く

何となき草の匂に親みて砂湯の人とものいへ
るわれ

水音の急なる川は陰となりとなりの川の眞白き月夜

かはほりの羽をもちたる山ありて溪をおほへり月のぼれども

おのがみち見出てしやうに月影をたのみて水の走る川かな

七八人新湯の川の水上に踏みて遊べる水晶の板

橋に出て月を見るなり山なれば岩屋の口に立つこちする

静かなる二十四時の過ぎぬればかへりくるな り山の端の月

あはれにも金錆したる月と見ゆ尾花の溪の霧
厚くして

霧の夜のあはれなりける月に似て青くくもれ
るいたどりの花

石佛の顔不思議なりなつかしや戀しやと云ふ
人にくらべて

あぢきなしへりくだれども人知らず思ひ上る
はましして見知らず

東京をすこし曇れる夕月のあかりに覗くあま
つかりがね

山の草女なれども花咲けど口びるの夢見るも
のも無し

大空の光が渡るかろさもて山をおほへる秋の
穂すすき

心おきわづらひがちに紅葉する北の箱根の仙
石の溪

夜明けぬと掌をばうつ水のもとに走りぬさび
しけれども

飛び立たんさまもしたりし朝の山襞のやうや
く濃くなりにけり

薄の毛逆立つことのあはれなり何におそるる
うらの草山

空はいと高く寂しきところぞと乙女峠になが
めて下る

日の見えず長尾の山の頂になほ金色の手はお
けれども

風起り山の方より落葉吹く大地を濁すけぶり
のやうに

つくゑなる白きすゑものこの中へ落葉何しに
身をおきにけん

とこしへにおなじ枝には住みがたき身となり
ぬらし落葉と落葉

桐の葉は鼠の尾とも見ゆる尾を清らにあげて
土にいこへる

月明しこれは闇夜に住みなれしおち葉ならめ
とあはれなりけれ

皷より笛のはやしにうつりたる霰ののちの初春の雨

伊豆の奥天城の山を夜こえぬ寂しきことに馴れはてぬれば

片側の長き溪川夕月が流す涙のこころこそすれ

烈しかる天城おろしの身に沁むと河津の橋の泣けば渡らず

半身を天城おろしにまかせつつ谷津の湯ぶねにあるあぢきなさ

藤原の湯ののどかなり夜となれどただ肱まげて晝ぬるごとし

天城山まことに雲の凍りたるつららと知りぬ
頂にして

滑らかに青をのべたる大空と離れて乾く一月
の山

ことごとくものを捨てたる形する葉蘭の雪の
たなごころかな

いたるべき處も過去も薔薇をもて今日は埋め
て君と醉はまし

春雨の降り埋めたるホテルかな熱海のみちの
きりぎしの下

夕暮の曇れる海に向ひたるテラスの椅子の乏
しかりけれ

いつしかも浴泉戒と云ふものを心に立てし人
なりしかど

女湯も海豚のあるに隣りたるここちおぼゆれ
海近くして

網代岬魚見が岬と重れるシュワルサロンの朝
の横顔

青海をわが裾に引く裳の如く見るはテラスに
つづきたるため

海鳴るやホテルの庭の芝草のつくるところは
きりぎしにして

ふくらみし帆のここちする芝山を出でて踏め
どもものの思はる

頂を今日は網代の奥に見る天城の渓の雪きえぬらん

うぐひすは皐月に聞くがなまめかし身もうす色の衣など着て

雲の峰ありとあらゆる蟬の身に熱の發して鳴き出づるころ

到るべきところにあらぬ世を見せて醒めたる夢と思ひなさまし

なつかしや文を賜はずうらめしやなど云ふはてもさびしからまし

浮びてははかなきものと見ゆれどもわがたけ磯の船に勝らず

越しがたきくろがねの輪のここちすれ沼津に
つづく長き松原

わが馬車は富士の左の綠金の線をかしこみ退
きて行く

あぢきなしわが手にとれば乾網はうすものな
らて鎖にぞ似る

青きもの夕月こころ海のうへ藤のしたかげ消
息の紙

七月の夜能の安宅みちのくへ判官おちて涼風
ぞ吹く

われの名に太陽を三つ重ねたる親ありしかど
さびし末の日

人のごと唯だ一いろの悲みに埋れてあるわが
身ともがな

休みなく時が斷つなるこし方のその外にある
こし方の夢

「人間往來」の後に

私は明治三十四年に初めて第一の歌集「みだれ髪」を版にしました。此の「人間往來」はその「みだれ髪」以來、昨年公にした「流星の道」と云ふ歌集までの作から、更に自ら選んで一冊にまとめました。凡そ廿三四年間の歌を之に代表させたことになります。

之を選ぶに當つて、すべて原作のままを採り、少しも改削を加へぬことにしました。今の氣持で改めては原作の心を失ひ、その時の實感に遠ざかるであらうことを恐れたのです。すべて推敲はその製作の時から餘り隔たらない間にするので無いと不自然な結果になると思ひます。

私は自分の生活の重要な表現として、いつも眞劍に歌を詠みます。それで今の作家のやうに濃厚な歌壇的意識を以て作つたものは一首もありません。特に此事を正直に書き添へて置きます。私の歌に、私自らが樂み、私自らが苦んだ跡はありますが、他に勝たう、他に誇らうと云ふやうな影は全く伴つて居ません。この事は私の歌を讀んで下さる人人が知つて居て下さるであらうと思ひます。

一九二五年九月

興謝野晶子

大正十四年九月十五日印刷
大正十四年九月二十日發行

人間往來
定價一円八十錢

著者　興謝野晶子
發行者　山本美　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者　松井勇　東京市芝區愛宕町二丁目一番地

發兌　改造社　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地　振替東京八四〇二番　電話高輪四九九三番

現代代表自選歌集

第一回

齋藤茂吉著	朝の螢	選定料價	一・一五八〇
島木赤彦著	十年	選定料價	一・一五八〇
古泉千樫著	川のほとり	選定料價	一・一八八〇
中村憲吉著	松の芽	選定料價	一・一八八〇
折口信夫著	やまのあひだ	選定料價	一・一八八〇
木下利玄著	立春	選定料價	一・一八八〇

第二回

北原白秋著	人間往來	選定料價	一・一八八〇
與謝野晶子著		近刊	
窪田空穂著		近刊	
若山牧水著		近刊	
前田夕暮著	生原林	近刊	
土岐善麿著	空を仰ぐ	近刊	

三ノ
民衆文庫之部